平城宮一〇一次（佐紀池）現地説明会資料

昭和五二年三月一二日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部では、昭和五二年一月二〇日から、第一〇一次調査として奈良市佐紀町の佐紀池で発掘調査を行ってきた。佐紀池は特別史蹟平城宮跡の西北部分にあり、明治一七年に作られた比較的新しい池である。佐紀池の北半部に二ケ所のトレンチを設定し、奈良時代の園池跡と古墳時代の溝が検出された。

1　奈良時代の園池

佐紀池北端部の東西トレンチの東と西とで、園池の東岸と西岸を検出した。西岸は、東から西にむかってゆるやかに上っていくもので、ほぼ真南北に近い。東岸も同様な傾斜で上っていくが、西岸とちがって、岸の傾斜面に小石を敷きつめて護岸と化粧を行っている。東岸の水際にはさらに大小の自然石を配して園池としての景観を整えている。

西岸と東岸にはさまれた池底は平坦な地山で、水深五〇～六〇センチメートル前後の浅い池であったと考えられる。この池底で古墳時代の溝を検出した。

次に、東西トレンチの南東約三〇メートルの地点に設けた南北トレンチの北半部で、東西方向に走る池の岸を検出した。東西トレンチで検出した東岸と同様、傾斜面には小石を敷きつめている。水際にも大小の石を配していたらしく、石の抜跡がある。

以上のべた園池の他に、奈良時代の遺構として東西トレンチで南北溝一条、南北トレンチで東西溝一条を検出した。いずれも素掘りの溝である。

2　奈良時代の遺物

奈良時代の池の底には植物の腐植層と砂層とが互層になった厚さ約五〇センチメートルの堆積層があり、この堆積層の中から奈良時代および平安時代初頭に属する遺物が出土した。

瓦類には丸瓦、平瓦、塼のほか、軒丸瓦七点、軒平瓦三点がある。木製品には下駄一点、曲物底板二点、金属製品には鉄鎌一点、神功開珎一点がある。木簡は二点あり、一点は習書風のもので「小」、「人」が判読できる。他の一点は直線数本を斜格子風に描いたものである。土器類では土師器、須恵器があり、墨書土器が一点ある。奈良時代中期に属する土師器皿の外面に

・　天平十八年潤九月廿七日□□□

内面に

高佐良九　□
佐良八　佐良冊
毛比冊　毛比冊
〔櫃カ〕
・二辛□　鋺形冊　片真利廿
□都支二□　瓷五柄
慶都支十口
土高佐良一

と墨書したものである。

3　古墳時代の溝と遺物

東西トレンチの奈良時代の池の底で古墳時代の溝を検出した。溝は幅約二メートル、深さ約四〇センチメートルで、北から南へ流れる。三ケ所に堰を設けている。

溝内には植物を含んだ黒色土が堆積しており、流木とともに土師器、木器、建築部材らしい加工木が出土した。土師器はいわゆる布留式に属するもので、古墳時代初期の庄内式に属するものも少量ある。木製品にはスコップ形の鋤一点、なすび形の鋤一点、ちきり一点、きぬた二点、台板一点がある。いずれも完形、ないし完形に近いものである。

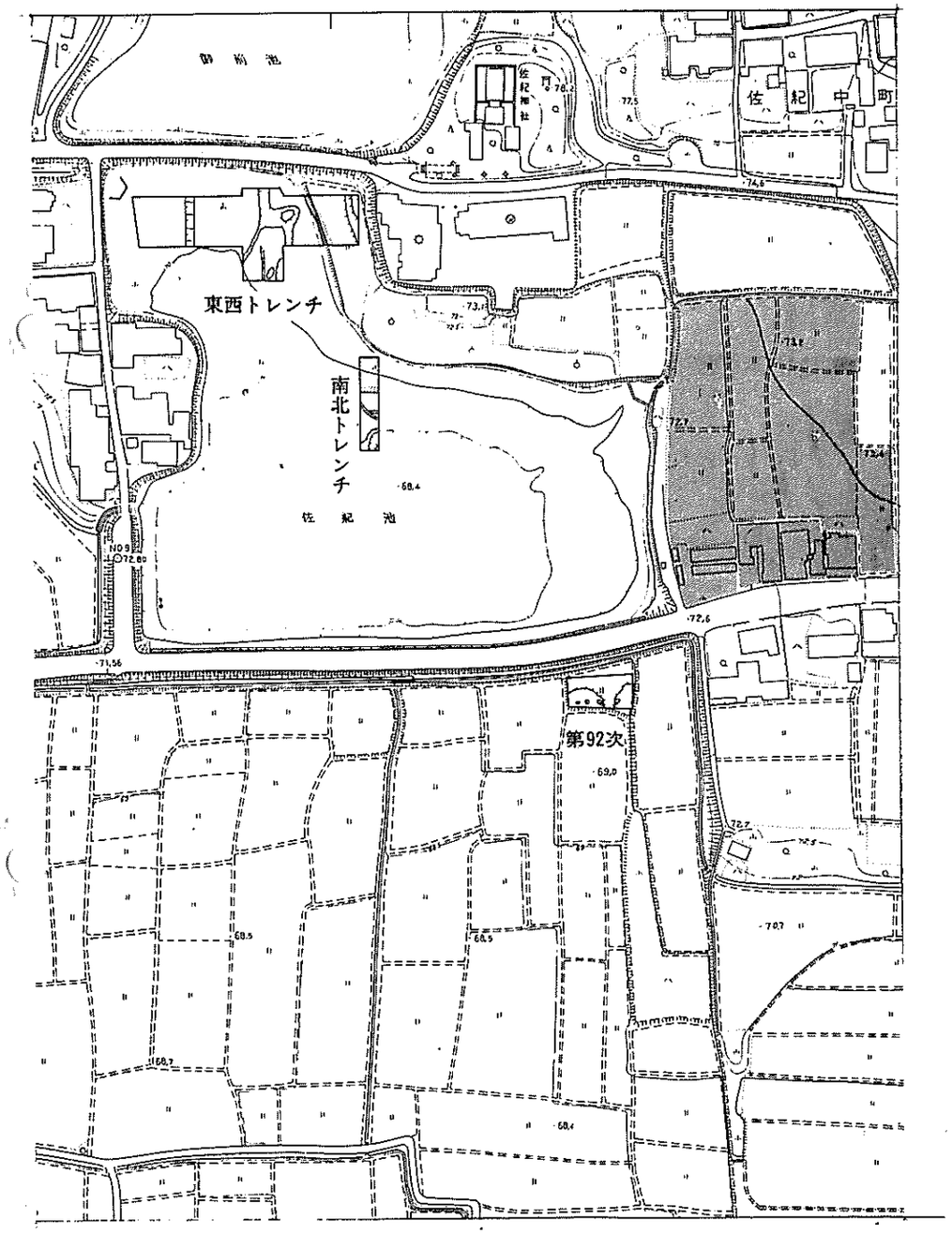
4　まとめ

昭和五〇年の第九二次調査で奈良時代の池の南岸が検出されており、自然地形も含めて、佐紀池一帯が奈良時代には園池であった可能性が強く考えられてきた。今回の調査で、部分的にではあるが、池の西岸、東岸、および東岸につながって東へのびる北岸を検出したことは、従来の推測を裏付けるとともに、石化粧のある整備された園池であることが今回はじめて明らかとなった。他方、佐紀池南部の東岸に接する水田地帯を調査した第二次調査、第八一次調査では、奈良時代の建物群が検出されており、園池の東限が、佐紀池から東にいかないことは明らかである。以上のことから、奈良時代の園池が現在の佐紀池とほぼ等しい規模のものであったと考えられる。

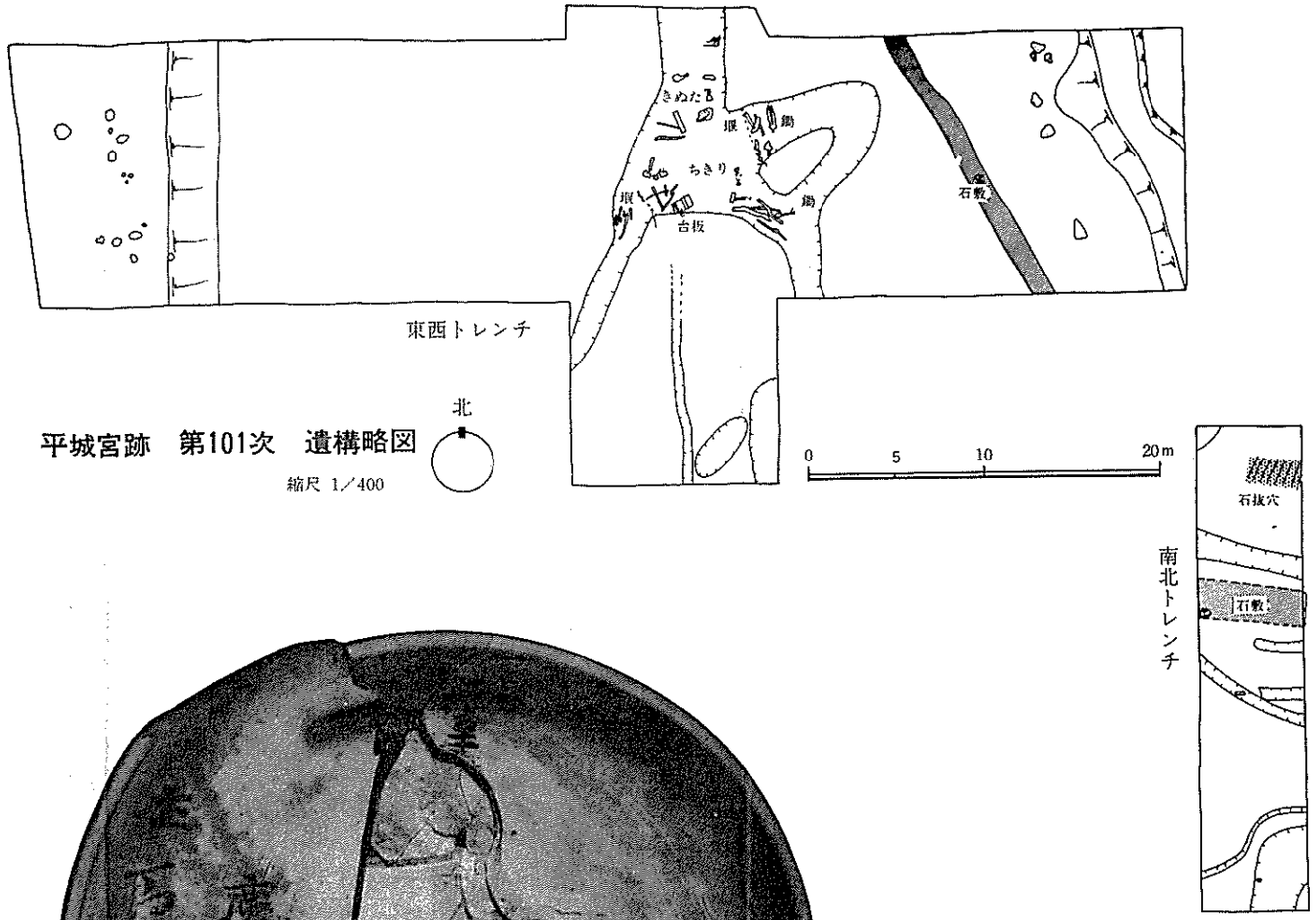
今回検出した園池が、奈良時代にはどういう名称と役割をもっていたかについてはなお検討の余地があるが、文献上に見える園池名に、天平十年のこととして、

・　秋七月癸酉。天皇御大蔵省覧相撲。晩頭転御西池宮。因指殿前梅樹。……

の記事があり、位置関係から西　　この可能性が考えられる。

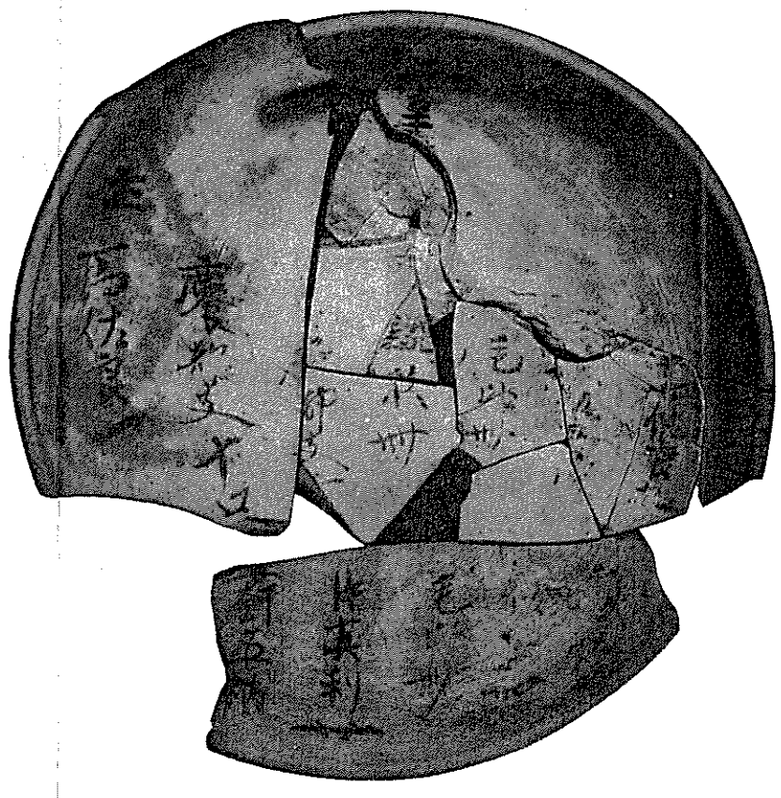


調査地位置図　1／2000（薄墨：第２次・第81次調査地）



平城宮跡　第101次　遺構略図

縮尺 1／400



墨書土器　1/2